





東京文化財研究所は、独立行政法人国立文化財機構の組織の一つで、無形の文化財を含む文化遺産全般の調査研究、保存科学・修復技術に関する調査研究、文化遺産に関する国際協力を行う機関です。

表紙解説

ドローンを用いたデジタル3次元計測の活用

歴史的建造物の記録において、近年、活躍しているのが、ドローンを用いたデジタル3次元計測です。危険な傾斜地や高所にある建物など、人がなかなか近づけないようなところでも、ドローンを飛ばして写真を撮り、寸法情報を持つデジタル3次元モデルとして記録することができます。このような新しい技術が、歴史的建造物を守り伝えていくためにどのように役立つかということを探るため、私たちの研究所では様々な試みを行っています。

裏表紙解説

ブータンの伝統的民家建築のデジタル3次元モデル

限られた時間内に多くの建物を調査する場合、ドローンを用いた3次元写真測量はひとつの有効な手段となります。建物だけではなく周辺地形も、寸法情報を持つデジタル3次元モデルとして記録することができます。

(文化遺産国際協力センター・浅田なつみ)

目次

- 02 黒田清輝の没後100年をむかえて
- 04 文化財の原材料を育む「自然」とその危機
- 06 ネリ―紙漉きに欠かせないもの―
- 08 第46回世界遺産委員会の開催

COLUMN

- 10 わたしの調査道具
やきもの研究者に伝わる木製の尺
- 10 シリーズ「無形の道具紹介します!」 第1弾
～三種の神器 平台・箱馬・毛氈～
- 11 顕微鏡で覗くミクロの世界―文化財の彩色の秘密―
- 11 映画のなかのアジアの街・建築 第2回
消えゆく街のいとなみ――「エレジー長江哀歌」
- 12 東文研の「中の人」紹介します
- 13 資料閲覧室利用案内
- 13 活動報告
- 13 研究活動支援のお願い



黒田清輝の没後100年をむかえて



〔図1〕 創立当時の
美術研究所図書室

令和6（2024）年は、日本近代洋画の先駆者であり、東京文化財研究所の前身となる美術研究所設立の原資を遺した黒田清輝の没後100年という節目の年でした。黒田の遺産により、彼自身の画業を顕彰するだけでなく、美術の研究に広く開かれた機関として「美術研究所」が創立されたのが昭和5（1930）年のことです。〔図1〕 創立当時の建物は、黒田記念館として現在は東京国立博物館が管理していますが、黒田の日記や書簡、写真といった資料は当研究所が所蔵し、また黒田記念館の作品の展示や貸出にも東京国立博物館と協力して対応しています。

今年は各地で黒田の没後100年に因んだ展示が続きました。黒田の郷里、鹿児島で大規模な回顧展「没後100年 黒田清輝と



〔図3〕「没後100年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち」展示作業風景、東京国立博物館

その時代」展（鹿児島市立美術館、7月24日～9月1日）が開かれたほか、「高橋由一から黒田清輝へ ―明治洋画壇の世代交代劇―」（栃木県立美術館、4月20日～6月16日）、「歌と物語の絵 ―雅やかなやまと絵の世界―」（泉屋博古館東京、6月1日～7月21日）での初期の大作《昔語り》関連の特集展示があり、そして東京国立博物館では「没後100年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち」（8月20日～10月20日）として、黒田及び同時代の近代画家たちの作品と、当研究所とのかかわりを示す資料による展示を研究所職員の企画により開催しました。〔図2,3〕

また、同展に出品された織田東禹《コロボックルの村》という水彩画をめぐり、招いた研究者とともに、美術史学、考古学、文化人類学などの領域を横断して検討する研究会を当研究所で開催しました。〔図4〕

来年1月にはシンポジウム「黒田清輝、その研究と評価の現在 ―没後100年を機に」を開催します。この100年間に蓄積された黒田研究を見直し、新たな一歩を踏み出す契機とできればと考えています。

（文化財情報資料部・吉田暁子）



〔図2〕「没後100年 黒田清輝とその時代」展の会場となった
鹿児島市立美術館



〔図4〕 研究会風景（9月6日）

文化財の原材料を育む 「自然」とその危機

ハッコヤナギの樹皮採取
内皮を民具の簀に利用する。
木が水を吸い上げている
梅雨時に採取する。(岩手県)

木や竹、漆、毛皮など、有形の文化財は基本的に自然素材から作られます。芸能や祭りなどの形のない文化財も、しばしば自然に対する信仰をベースに誕生し、楽器や衣装、山車など、自然素材から作られた道具がなければ成り立ちません。その意味で、すべての文化財は「自然」と「自然を使うわざ」を基盤に成り立っていると言えます。その基盤が、いま足元から揺らいでいます。文化財を支える原材料が、各地で入手できなくなりつつあるのです。

例えば多くの民具は樹木から作られますが、人が山に入らなくなって定期的な伐採が行われなくなったために、加工に適した若木が入手できなくなっています。あるいは文化財を保存する桐箱は、キリ材全体の需要が低下したことによって材の産地や流通システムが縮小し、良材の安定的入手が難しくなっています。

こうした原材料不足は、自然環境や社会環境の変容によって引き起こされたものであり、人と自然との関わりが急激に希薄化したことが背景にあります。つまりこれは私たちの生活の変化に直結する大きな問題であり、もはや文化財関係者だけで解決できるものではありません。できるだけ多くの人に現状を知ってもらい、社会全体として解決の道を探ることが必要なのです。

現場では、林業関係者や市民団体と連携しながら原材料を新たに植林したり、広く素材の提供を呼びかけたりする新しい動きも見られます。私たちもこうした動きを注視し、また広く発信することで支援したいと考えています。

みなさんも文化財を目にすることがあれば、その素材は何なのか、そしてそれは一体どこから来たのか、文化財の背景にある「自然と人との関係」に思いを馳せてみてください。まずは知ること、それが問題解決への第一歩になります。

(無形文化遺産部・今石みぎわ)



木籠作りの実演

「原材料の危機」をテーマに令和6(2024)年8月9日に東京文化財研究所で開催されたシンポジウム：森と支える「知恵とわざ」。5名の方に自然を使うわざを実演してもらった。



キリ材のアク抜き

アク抜きのため製材した状態で3~4年天日に干す。「会津桐」の産地・福島県三島町では、町をあげて国産材の安定供給とキリ材を使った新商品の開発等に取り組んでいる。

ネリ―紙漉きに欠かせないもの―

和紙を漉く時には、ネリと呼ばれる材料が必ず必要です。植物（トロロアオイまたはノリウツギ）から採取される粘液で、オクラのネバネバをイメージしてもらえると分かりやすいでしょう。ネリは、水の中で紙の繊維をきれいに分散させるために用います。ネリを使うことではじめて、ムラのない美しい紙を漉くことができます。

しかし、ネリの採取は手間がかかります。特にノリウツギは、栽培することができず、山を分け入り野生のノリウツギを見つけてきて採取するしかありませんでした。和紙生産量の減少に伴う需要低下・クマの出没・高齢化など、様々な要因が重なって生産者はどんどん減っていき、平成の終わり頃にはノリウツギのネリを入手できなくなる瀬戸際にまで追い込まれました。例えば、掛軸の修復には宇陀紙という紙が必須なのですが、宇陀紙はノリウツギでないと紙が漉けないという特徴があります。すると掛軸の修復ができないことになり、貴重な文化財を後世につなぐことができません。

そのような中、北海道標津町に、ノリウツギが大量に、しかも平地にまとまって自生していることが明らかになりました。そこで、町の全面協力のもと、標津のノリウツギを紙産地に供給する事業が始まりました。令和6（2024）年の出荷量は200kg強となり、標津産ノリウツギのネリが各地の和紙産地で用いられています。また、標津町と東京文化財研究所は令和5（2023）年11月に協定を結び、ノリウツギの保存方法に関する研究や、ネリの科学的性質に関する研究などを行っています。

この取り組みは、標津町の町おこしの一つにもなるかもしれません。文化を伝えることと、町おこしと、両立を目指したいものです。

（保存科学研究センター 西田典由・趙依寧・倉島玲央・早川典子）

ノリウツギの林

霧の立ち込めるノリウツギの林。
神秘的な風景です。



ノリウツギの花 ノリウツギはアジサイの仲間、花もよく似ています。



ノリウツギのネリ

ノリウツギの樹皮を叩いて水に漬けた後、目の細かい網でろ過してネリを取り出しています。粘り気があるのが写真でも分かるでしょうか？



ネリの実験

なぜかネリが黒変してしまう問題が発生しました。その原因解明のための実験風景です。



苗を植える

ノリウツギは栽培できないと言われています。何とか栽培できないか？

第46回世界遺産委員会の開催



第46回世界遺産委員会が令和6（2024）年7月にインドの首都デリーで開催され、日本など21の委員国、その他の締約国や諮問機関の代表らが一堂に会し、世界遺産の新規登録や保全状況などについて議論されました。東京文化財研究所からは職員5名が参加しました。

今回、イタリアの60件目の世界遺産「アッピア街道」など、24件の資産が新規登録され、世界遺産の数は1223件となりました。中には、情報照会が勧告された日本の「佐渡島の金山」や、紛争地にあり緊急に推薦されたパレスチナの「テル・ウンム・アメル遺跡」など、検討を経て登録が議決された推薦も5件あります。一方、高速道路の工法が課題とされたイギリスの「ストーンヘンジ」など、危機遺産登録勧告を受けた資産はいずれも登録を回避、セネガルの「ニョコロ=コバ国立公園」は危機遺産リストから除外されました。その他、緩衝地帯の設定や遺産影響評価の運用など、世界遺産の適切な管理のあり方についても議題に上りました。

本会議のほか、メイン会場やデリー市内の世界遺産では、会期中に40ものサイド・イベントが催され、世界遺産の保護に関する取り組みが紹介されました。また、サテライト会場では「Incredible India」と題した、インド各地の文化や自然の紹介が連日行われました。サイト・マネージャーや若手専門家を対象としたフォーラムも同時期に開催され、持続可能な遺産管理などについて議論が深められました。

10日間に及ぶ長い会期で苦勞もありましたが、現地参加はオンラインでは得難い最新情報を収集する絶好の機会です。当研究所では11月に「世界遺産研究協議会」を開催したほか、引き続き今回の内容を含む関連情報を発信します。

（文化遺産国際協力センター・松浦一之介）



保全状況に関する審議

ストーンヘンジは遺跡内の工事計画変更が評価され危機遺産入りを回避したものの、今後の状況次第で再び審議の対象となる。



サイド・イベントの様子

会場は常に満席で、各国の参加者は長時間に及ぶ会議の疲れも見せず遅くまで熱心に意見交換を行った。



サテライト会場の催し

昼食時間、突如としてラッパや太鼓の音が鳴り響き、目にも鮮やかな民族衣装に身を包んだ男女が踊り出して会場を沸かせる。

（上）第46回世界遺産委員会の議場

登録決定後、締約国はあらためて遺産の意義や保存活用の抱負についてコメントし、関係各位に謝意を伝える。

（左）メイン会場「パーラト・マンダバム」

「パーラト（भारत）」はヒンディー語によるインドの国名であり、「マンダバム」は「人々が集う場所」を意味する。

（右）議場における日本の代表団

「佐渡島の金山」の登録決定直後、安堵の表情を浮かべる日本代表団



COLUMN

わたしの調査道具

やきもの研究者に伝わる木製の尺

やきものを専門とする私は、壺のサイズを測る機会が時折あります。そんな時に活用するのは、この木製の尺です。片面に高さを測る目盛、もう片面に径を測る目盛がついています。木製ですので、やきものの表面に触れてもカチンと音が立たず、安心です。時折「どこで売っているのか」と聞かれますが、市販品ではありません。先輩研究者が使っているのを見て、その形をメモし、木工製作をしている知人によってもらった特注品です。その先輩もまた、先輩の尺を写したそうです。まさにやきもの研究者に代々写し継がれる特別な調査道具といえます。

(文化財情報資料部・田代裕一郎)



シリーズ「無形の道具紹介します!」 第1弾 ～三種の神器 平台・箱馬・毛氈～

無形文化遺産部では、公演機会の少なくなった古典芸能等の記録撮影を行い、可能な範囲で公開を進めています。例えば邦楽の収録では、なるべく普段の舞台に近い環境で演奏してもらうため、無形文化遺産部のスタッフが平台^{はこうま}を箱馬^{はこうま}で支えて組み立て、上から毛氈^{もうせん}を掛けて整えて「山台^{やまだい}」を設えます〔上図〕。平台・箱馬・毛氈は、無形文化遺産部の実演記録にとって欠かせない道具、言わば「三種の神器」なのです。

(無形文化遺産部・前原恵美)

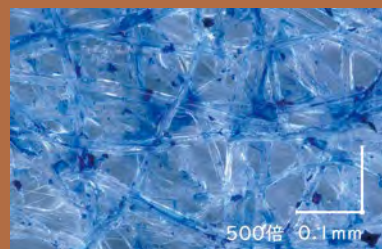
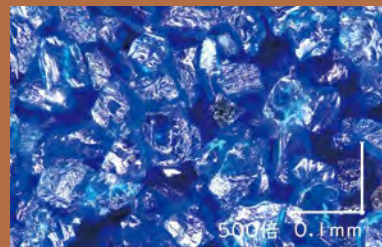


令和6(2024)年度実演記録「宮園節」
第9回の様子

顕微鏡で覗くミクロの世界 —文化財の彩色の秘密—

顕微鏡を覗くと、普段見えないミクロの世界が広がり、文化財の色を調べる手がかりになります。たとえば、絵画と浮世絵の青を顕微鏡で見ると、絵画の青はゴロゴロした粒子〔上図〕で、浮世絵の青は紙の繊維を染め付ける力のある非常に細かい粒子〔下図〕でできています。絵画の青は藍銅鉱という鉱物を砕いて作られた古い顔料で、浮世絵の青は18世紀以降に開発された鮮やかな人工合成顔料です。これが北斎や広重の作品でよく使われました。こうした違いを見つけることで、色彩が持つ深い意味と歴史が見えてきます。ぜひ顕微鏡でミクロの世界を体験してみてください!

(保存科学研究中心・紀芝蓮)



市販画材の群青(上図)とブルシャンプルー(下図)を使って塗布した見本の顕微鏡写真です。

映画のなかのアジアの街・建築 第2回 消えゆく街のいとなみ —「長江哀歌」^{エレジー}

街の家々が解体され、馴染みある風景が失われていくとき、私たちは何を選択し、どのように振る舞うのだろうか。

「長江哀歌」は、大河・長江の中流に建設された三峡ダムに沈みゆく奉節の街を舞台としています。撮影時の2005年は、ダムや巨大な橋、移転先の真新しい都市が急ピッチで建ち上がっていきな、劇中の台詞にもあるように「2千年の街が2年で消える」時期。水没する家々の解体作業が進められていました。

人力で破砕されるコンクリブロック壁とハンマーの音、解体決定の「拆」印が押された家、水没前最後の発掘作業——。人々の実生活が映し出される傍で、消えゆく街のなかで、登場人物たちの物語が展開していきます。

時に、UFOが出てきたり、記念碑的建物がロケットのように飛び立ったりと、少し不可解で幻想的な“映画の”シーンも現れますが、それらすべてをくめて、変貌する街での本当の出来事のように感じられます。

[作品情報]

題名|長江哀歌

監督|ジャ・ジャンクー

出演|チャオ・タオ、ハン・サンミン、他

公開|2006年

(文化遺産国際協力センター・黒岩千尋)

東文研の「中の人」紹介します

黒崎夏央

文化財情報資料部
アソシエイトフェロー

日本彫刻史を研究しています。現在は、奈良県薬師寺金堂薬師三尊像を研究対象とし、日本だけではなく中国・朝鮮半島との関係性から本作の制作背景について考えています。



小田原直也

無形文化遺産部
アソシエイトフェロー

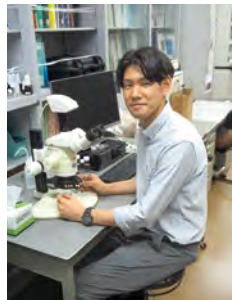
こんにちは！休みの日はもっぱら猫と戯れたりオンラインゲームに興じたりしておりますが、普段はこのカメラを肩に担いで、文化財の保存・修復に必要な道具や原材料の調査を映像記録として撮影したり編集したりする仕事をしています。



島田潤

保存科学研究センター
アソシエイトフェロー

もともと昆虫学が専門で文化財害虫の研究をしています。現在は、外来種であるニューハクシミの防除方法の開発の研究を行っていて、生きたニューハクシミを飼育し、様々な環境条件下での生存確率を調べています。



松浦一之介

文化遺産国際協力センター
アソシエイトフェロー

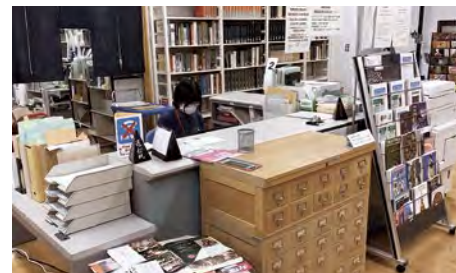
長らく発掘の仕事をしていました。それからイタリアに留学しました。過去の歴史を物語る遺跡をわたしたちが暮らす現在の環境でどのように保存するのか、ということをテーマに研究しています。キーワードは、景観です。



資料閲覧室利用案内

資料閲覧室は文化財に関する調査研究、または学術・文化・教育事業のために所蔵資料を必要とする方がご利用いただけます。詳しい利用方法等はウェブサイトをご覧ください。

<https://www.tobunken.go.jp/joho/japanese/library/library.html>



活動報告

東京文化財研究所のウェブサイトでは、主に研究員が執筆した活動報告を随時掲載しています。文化財を守る調査研究活動の最先端をぜひチェックしてみてください。

<https://www.tobunken.go.jp/materials/katudo>



シンポジウム「森と支える「知恵とわざ」
―無形文化遺産の未来のために」実演の様子



日光東照宮御仮殿鐘楼での
湿度制御風殺虫処理の視察

研究活動支援のお願い

文化財を後世に伝え残すための研究活動に対し、皆様に広くご寄附をお願いしています。皆様の温かいご支援とご協力を、心よりお願い申し上げます。

国立文化財機構寄附ポータルサイト
<https://support-us.nich.go.jp/>



TOBUNKEN NEWS

Facebook | <https://www.facebook.com/NRICPT>
X | https://x.com/tobunken_nich

発行 | 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43
<https://www.tobunken.go.jp>
編集 | 研究支援推進部
デザイン | 内山耀一朗
印刷 | 渡辺印刷株式会社

TOBUNKEN NEWS
2024年12月発行



ブータンの伝統的民家建築
のデジタル3次元モデル